答えが1つではない問いを自ら立て、心からのめり込める課題として探究する生徒に、
教師はどのようにかかわっていけばよいのか。
いち早く探究学習を通してこれからの教師のあり方を考えてきた2人が語り合う。

対談
教師に求められる探究マインド

生徒の悩み、もがく経験に、1人の人間として敬意を払う

東京都・私立かえつ有明中・高校
佐野和之

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
槌本六秀（つちもとむつひで）

さの・かずゆき　教職歴 26 年。同校に赴任して 6 年目。副教頭。理科担当。生徒自身で設定した課題に取り組む学校設定科目「プロジェクト科」の設置など、同校の「新しい学び」をつくる中心的存在。心理学的コミュニケーション理論や、リーダーシップ能力開発、チームビルディングなどの講演・研修を全国の学校で行う。

つちもと・むつひで　教職歴 23 年。同校に赴任して 24 年目。進路指導主事。理科担当。2010 年度からキャリア教育の一環として探究学習を授業に取り入れ、17 年度に大手総合建設企業と連携して、「これからの社会と未来の建造物」を考える取り組みを行うなど、同校の探究学習をけん引してきた。

探究学習に携わる教師に求められるスタンスとは

槌本　生徒の探究学習を見取るスタンスを考える上で、自校の探究学習で重視するのは課題設定なのか、問題解決のプロセスなのか、それとも解決できたことなどの成果なのかを教師間で議論しておくことが重要です。本校では、課題設定や問題解決のプロセスを重視していますが、一方で、それらを重視するほど、「こうすれば形になる」といった、ゴールまでの工程を逆算し、生徒を導くことが難しくなります。本校の森先生、大坪先生にとって、先に探究プロジェクトに取り組んだ私の事例も、あくまで参考にしかなりません。指導を逆算することが難しく、生徒や同僚、他校の教師とも話をしながら、教師自身が、今の自分と目の前の生徒にとってよりよい探究学習の進め方を模索するというのが、探究学習と教科学習の大きな違いだと思います。

佐野　教師が自分の力で模索し続けるためには、「こうなれば形になる」「これが成功だ」といった常識や思い込みをいったん手放してみる

ことも大切だと思うのです。本校の大木先生は、自分の中にある、常識や思い込みをつくっているものを、生徒の前で赤裸々に出そうとしました。自分の中に「こうあるべき」といった思い込みが存在していることを自覚した時に、今までとは違うあり方を選択するチャンスが生まれますし、生徒の不安や葛藤をより敏感に察知できるようになるのではないでしょうか。もちろん、自分の中にある思い込みに気づいても、それをすぐに手放すことができず、生徒との向き合い方を変えられないと悩むことになるかもしれません。でも、私はそれでもよいと思うのです。変化するタイミングは人それぞれですし、自覚し、悩むことで変化するチャンスは続くのですから。ただ、教育のあり方が過渡期を迎えている今、変わるチャンスが自分にあることは、どの教師も自覚しておくべきだと思います。

槌本　今年度、初めて探究プロジェクトを担当し、悩みながら生徒とかかわっている森先生、大坪先生ですが、悩んでいるからこそ、生徒は両先生がありのままの姿でかかわってくれているのだと感じ、信頼しているのだと思います。私も、初めて探究プロジェクトに取り組んだ時、参加していた3年生のある生徒に、「正直なところ、探究プロジェクト、どうだった？」と尋ねたことがあります。私同様に戸惑いながら活動していた生徒の答えは、予想外にも「1年生の時からやりたかった」でした。私には、必ずしも楽しそうに参加していたようには見えなかった生徒たちでしたが、探究学習の価値は分かっていたのでしょう。実は生徒は、学びとは何かを本質的には理解していますし、思考が深まることも実感し、それを楽しんでいます。だからきっと生徒は、森先生、大坪先生との探究学習を楽しんでいるのだろうと思いますし、両先生は、生徒の学ぼうとする気持ちを、これからも信じていけばよいと思うのです。

なぜ、探究学習では「聴く」ことが大切なのか

佐野　人は、悩みや不安を抱えていても、それを他者に語り、しっかりと受け止めてもらうことで、前向きな気持ちになれることがあります。そのため、本校では、プロジェクト科の活動の中で、相手の話をしっかり「聴く」ことを通して、他者に貢献できるようになる体験を積み重ねています。

槌本　聴いてもらうことで前向きになれるということは、進路指導における面談などでもよくあることです

森先生、大坪先生とは、「高校の探究学習の本質」をよく語り合います。私たちが大切にしているのは、物事の前提について、「本当に？」と、生徒に問い直すこと、そして、「人とかかわっていくことには意味がある」と、人生において他者と協働する価値に気づかせることです。

▶槌本先生が教科指導で行う探究学習の実践について、本誌 2018 年 8 月号の特集でご紹介しています。

よね。生徒は自分の中にあらかじめ答えを持っていて、こちらはただ話を聴いているだけにもかかわらず、生徒は「自分の考えを整理できた」と言って帰るということはよくあります。

佐野　生徒が相談に来た時、私たち教師が、「この生徒は、こういうことが言いたいのだろう。だから、こういうことを言えばよいだろう」と想定してしまうと、生徒とのやりとりは、その範囲内で収束しがちです。しかし、その想定をいったん外して、「ただ聴く」ことに徹していると、想定外のより重要な話が出てくることがありますし、思いをすべて話すことで、生徒は自分で自分を整理できます。

槌本　探究学習における課題設定などで、生徒に「こうしなさい」と指示することはありませんが、生徒が自分が取り組んできたことや考えてきたことを頭の中で整理できていないなと感じた時は、「ここがつながっていないように思うけれど……」などと指摘することはあります。教えるというより、一緒に整理するという感覚です。

佐野　「聴く」ことは大切ですが、それは生徒に何も言わないということではもちろんありません。探究学習において生徒と語り合う中で、生徒に視野の狭さや情報の少なさを感じた時は、「こんな情報が足りない気がする」「この課題に実際に取り組んでいる人が、どんな思いを持っているのかを直接聞いてみたら、何か得られるかも」などと、生徒に自分の考えを伝えたり、「今のはこういうことかな?」といった質問をしたりするのは、生徒への貢献になります。ただ、「これを調べなさい」とは言いません。なぜなら、私が差し出したものが、その生徒にとって本当に必要なものかどうか分かりませんし、教師が先に判断や評価をしてしまうと、整理する機会を生徒から奪いかねないからです。提案はするけれど、それを選択するかどうかを決めるのは、あくまでも生徒自身です。仮に一歩を踏み出せず、停滞したとしても、どうすればよかったのかを生徒自身が考え、修正して次に生かせばよいですし、そのプロセスが、探究学習では最も重要なのではないでしょうか。

槌本　「なぜ、この課題にしたの?」と生徒に理由を聞いてみても、考えがまとまっていなかったり、説明が言葉足らずだったりして、少々話を聞いたくらいでは、よく分からないということはしょっちゅうです。それでも、生徒の本当の思いが見えてくるまで粘り強く聴いていると、生徒が私の想定とは違うことを考えて

大木先生は、本校の「プロジェクト科」の立ち上げにもかかわった仲間の1人です。今までの自分を形作ってきた殻の中には収まらない活動に、時に戸惑いながらも、生徒とともに自分の殻を破ろうとひたむきに取り組む大木先生を、心から尊敬しています。

いたと分かることがよくあります。「なるほど！　そう考えてこの課題にしたんだね！」と笑いながら、「それだったら、こういった方向からもアプローチできるかもしれないね」「こういうキーワードを盛り込んで説明すると、もっと分かりやすいと思うよ」などと、1人の人間として感じたことを言っています。

佐野　教師が生徒に質問したり、自分の考えを伝えたりする時に、それは生徒の考えを整理するための貢献だという立ち位置でいられれば、生徒への言い方が強いものになったとしても、生徒は、「先生、それは違うと思います」と、自分の考えを主張するはずです。そもそも私たちは、自分が尊敬している人が話している時に、多少話の内容が分からなくなっても、「何を伝えようとしているのだろうか」と、真意を受け止めようとしますよね。自分の尊敬する人に向き合うあり方で、生徒の頑張りにも向き合いたいと思うのです。

探究学習で求められる教師と生徒のあり方とは

槌本　探究学習における課題設定は、1つの科目として成立するくらい大変なことだからこそ、生徒が課題設定に悩み、もがく経験は、成果物以上に価値があると思っています。以前、1人の生徒が私に、「課題設定について、昨日も2時間くらい考えたのですが、どうにも進みません」と言ってきました。私は生徒に、「しっかりとスタートラインに立ててよかったね。ここから探究学習が始まるよ」と返したら、「なるほど……」と考えながら去っていきました。たわいもない会話でしたが、「全然進んでいなくても、思考は深まっている」ことに、いつか生徒には気づいてほしいと思いました。私たち教師は、生徒がもがくことを大切にするのであれば、「最近、生徒がこういう活動をし始めた」「こんな提案ができるようになった」などと、生徒の変化や挑戦を語り合いたいと思います。そうした対話の中でこそ、自校の探究学習の評価を共有することができ、探究学習の形骸化を防げると思うのです。

佐野　探究学習という学びについて、教師同士、生徒同士、そして教師と生徒でもっと語り合うことで、お互いの強みや弱みを安心して打ち明け合い、苦手なことは同僚や生徒に委ねることができればよいと思いますし、学校がそういった関係をつくる場になれば、社会も変わっていくはずです。そうなってこそ、学校はこれからも存在意義のある場であり続けると思います。

槌本　「先生たちは探究学習についてこんなふうに考えているけれど、どう思う？」と生徒に問いかけ、これからの学びを生徒と一緒につくっていけるとよいですね。生徒や同僚と語り合いながら、生徒が何を考えてきたのかを丁寧に見取っていきたいと思います。

かえつ有明中・高校の教員研修

かえつ有明中・高校では、教師は対話を通じて生徒の探究学習を支援していく。そのため、感じていることを率直に表現でき、自己と他者を尊重できる関係を築くことが教師と生徒双方に求められる。

そこで同校では、教師が自己と他者を理解することを通して、教師のチーム力を高める教員研修を実施している。

◎教員研修でテーマとなった学びの理論や手法の一例

- **U理論**　過去の延長線上にない変容やイノベーションを、個人やチーム、組織やコミュニティー、社会で起こすための原理と実践手法
- **NVC（Non Violent Communication）**　相手とのつながりを持ち続けながら、お互いのニーズが満たされるまで話し合いを続ける共感的コミュニケーションの手法
- **パターン・ランゲージ**　対象領域における「経験則（成功に潜む共通パターン）」を「言語化」して共有する方法

なお、同校では、上記のようなテーマの研修を、自校の教師だけでなく自校の生徒、他校の教師や保護者、学生や社会人などにも門戸を開いて実施しており、教師が多様な人々と学ぶ機会もつくっている。